

伝承と革新

〜世界中の人々に価値ある印を〜



ともえせんこう
巴染工株式会社
(盛岡市)
代表取締役社長

東 條 誠

盛岡・中津川沿い、紺屋町で112年

当社の創業は、1908（明治41）年、山形出身の初代東條代助が現在の本社所在地盛岡市紺屋町で染物屋を開業したことに始まります。私は5代目で、2007（平成19）年に4代目の父・弘の後を継ぎ37歳で社長に就任しました。

初代の代助は山形に生まれ、米沢工業専門学校（現在の山形大学工学部）で化学染料を使った最新の染め技術を学んだ後、染色技術の講師として宮城、岩手を巡回し人材育成に努めていました。当時の紺屋町には藩政時代から続く染物屋が集まり、多くの職人が街を流れる中津川で染物洗いを行うなど、染物が盛んな盛岡で自分も染物屋として生きていくと決心したと聞いています。

その後、2代目新太郎は県内の業者を集め半纏組合を設立し初代理事長を務め、3代目

信夫は東京で修業した技能・技術を生かし浴衣や幟の製造も手掛け、1951（昭和26）年

に有限会社巴染工場を設立しました。「巴」は2代目が、商人（生糸・糸の売買）・機（はた）屋・染物屋（糸染）の三者で「三ツ巴」になって商売に精を出す、という意気込みを屋号にしたものです。4代目の父・弘は反応染料という当時のドイツの染色技術の実用化を全国の同業者と協力して実現し、業界に広めて参りました。

時代の変化を追いながら

私は先代・弘の長男として、1969（昭和44）年に生まれました。はじめは家業を継ぐという意識はなく、服飾に興味をもち、デザイン関係の学校に進みましたが、様々な事情も重なり、卒業後は家業を継ぐこととし、国内の幟や旗などを手広く扱う名古屋の大間

屋で百貨店や役所関係を中心とした営業の修業を3年間行いました。

その後盛岡に戻り、職人さんたちと一緒に仕事をしながら、様々な染色の技術・技法を習得しましたが、製造方法は昔ながらの職人の手作業に頼ったままでした。打ち合わせでポスター1枚作成するのにも1日がかかりで書き作成し、色やデザインの変更があればそれも1日がかりの作業で、前近代的ともいえる生産体制でした。

染物業者はもとと多品種少量の受注生産のため、小回りを利かせ、伝承による技能や染色技術、デザイン力といった総合力を活かすためには、熟練した職人氣質・職人芸に頼る部分が多く、昔ながらの染物屋のままの規模・形態が残る業者がほとんどです。

しかし、製造業全体を見れば、システム化が進み製造工程は大きく変革しており、染物

屋もこのままでいいはずがないと考え、当時は出回り始めた頃でずいぶん高価でしたが、パソコンとデザインソフトを購入し、マニュアルもなく手探りで操作を続け、職人芸と同等の最終的な出来上がりを確認できると、職人さんも「教えてくれ」と言ってくれるようになりました。

ちょうど電電公社さんのNTT民営化と重なり、幟や旗の需要が膨らんだ時期で、同業者の皆さんの受注にも対応し喜んで頂きました。その後、Jリーグのスタートもあり、フルカラーの旗や幟、横断幕等の注文にも対応できる機械の導入も進め、受注生産の量産対応も進めてきました。

本当に守りたいもの

こうして機械化・デジタル化を進め本業を拡大する一方で、顧客の要望に応じて染色技術やデザイン力を活かした店舗の内装やディスプレイ等、宣伝や誘客効果に繋がる提案も行うなど、事業が多角化し裾野が拡大してきました。

と同時に、そんな新たな成長の予感の一方で、繊維に色を染め、模様や印を染めていく、といった粗業であり本業である「**印染め**」が廃れていく、そんな予感がして、それが不安となり、このままではいけないと判断し、軸を戻して本業回帰に舵を切りました。

当然、商売のネタが少なくなりましたので、商圏の拡大を目指し県内を飛び出し、東京都

内をはじめとした全国への営業展開を始めました。飛び込み営業で門前払いも多かったのですが、「御社の名前、何十年前前に聞いたことがあるな」と言ってくれるところもあり、歴史の重みも噛みしめながらの全国行脚でした。おかげさまで、今では北海道から沖縄までお取引先ができるまでになりました。

伝えていきたいこと

そして社長就任から3年後の2010（平成22）年、人生の半分を過ぎ、そのまた半分



社員みんな力で合わせて

の人生を幟・旗の仕事に携わってきた私のこれからの使命は何だろうと振り返った時、それは「世の中に染を通じてメッセージを伝えていく」ということでした。「人々の暮らしの中に染の美と温もりのある生活を伝え、街は繁栄して賑やかになり、幸せな社会を築いていく。そのために社員と共に全力でその夢を叶えていきたい」。そんな思いを社内外に伝える経営理念を策定し、基本姿勢を示しました。

社員のみんながいて、伝統技能を守る一方で、新しい時代に合った技法を取り入れながら、いいところを皆で持ち寄ってこそ、新たな製品開発ができ、染色から縫製までの一貫生産による高品質を維持できる。伝承と革新のどちらもないと生き残れません。昨年はニューヨークのギャラリーでこの「伝承と革新」をテーマとした手拭や半纏、そしてオリジナルのジャケットなどの展示会を開催し、世界に向けた染文化のメッセージも発信しています。

創業から今日まで、創業の地で「染」を通じて地域の皆様に支えられながら事業を進めて参りました。新型コロナウイルスの脅威は当社にも大きな影響を及ぼしていますが、岩手から全国へそして海外へと日本の染文化をこれからも発信していきます。そしてこれからも業界のリーダーとして共存共栄を図り、業界全体の発展も目指していきたいと思っています。